竜丘村公民館報
発行人 木下 右治
編集人 編集部
印刷所 信州印刷KK

町村合併の動向

一町二ケ村を目標

鼎と松尾の意見不一致が障害

去る三月二十二日にわが龍丘村合併対策研究会小委員会（村長、助役、村議全員、前歴村長教育委員長、各区長）は同日龍丘村を来訪された松尾村代表者二十名と会見し、一町二ケ村合併を目標に鼎と折渉する事を協定し、以後一町二ケ村の代表者が話合を行ったが、鼎の主張する伊賀良村を加えての一町三ケ村案を松尾村が呑む事が出来ず結論を得ないまゝに現在に至っている。

二十二日松尾、龍丘村との協定内容は、

1、松尾村と龍丘村とは相結び、鼎町を勧誘して一町二ケ村の合併を実現しよう。

2、よって松尾村と龍丘村とは各々委員を十名出して鼎町と折渉する。

等であり、そこで三月二十六日本村委員（林村長、今村助役、前島議長、伊原副議長、北沢総務部長下平産業部長、中平厚生部長、今村土木部長、代田教育委員長）は松尾村を訪ね、松尾村委員と前回の協定の確約と鼎への働きかけについての懇談をした。

三月三十一日に両村代表委員は鼎町を訪ね、一町二ケ村案を提案して懇談したが、鼎町としては伊賀良村を加えた一町三ケ村案を主張し、松尾村は一町二ケ村案で行きたいと云うところからこの日は意見の一致を見るに至らなかった。

結局鼎町としても松尾村としてももう一度考えてみるという事で懇談は次回に譲られた。

これに対し本村の林村長は次ぎの様に話された。

林村長の話

すでに本村の目標もはっきりした事であり現在以上になんとか事態を進展させたいと念願しております。それには議会の皆さんとも相計り松尾、鼎の円満な話合いの結論が出される様間に立って努力したいと考えます。

論説

町村合併の胎動

町村合併の実現もいよいよ目前に迫って来た。わが龍丘村の位置は、飯田方面と天龍峡方面の中間にあるので、南北から合併を呼びかけられて、戸まどいしている形であったが、このどたん場まで来て猶迷っていたのでは信を近村から失うであろう。

最近各分館に於て合併研究会が開催され、村当局、議会代表からその経過の報告をきき、各区民の意見が出て盛に討議されその区としての希望が表現されたのであった。

その区の位置によって、その色合の多少異るのは当然のことであって、一応各区の希望が率直に述べられて然るべきである。

然しわが龍丘村の位置からすれば全区全村民の意見が全部一致する事は到底のぞまれないことである。事の決定はもっと大乗的な立場に立ち、あらゆる角度から検討して最後の判断をくだすべきである。要は何のために合併するのかという一番大切な観点を忘れてはならない。経済力の最も強力な村が出来てこそ、合併の意義が成立するのである。眼前の得失や一地域の利害のみを主張し合うときではない。十年二十年のむこうに目標を置き、全村民の福祉の将来を考える時、方針はおのずから決定されて来る筈である。過去のゆきがかりを棄て、お互に感情を静め冷静な判断のもとに最後の腹をきめるときが来たのである。

青年会主催の村民討論会に於ける村民の意向をきき、各区の研究会の意向を聞いたところ村当局並議会は、この際公正な立場に立って村の方針を定め、その線に沿って近隣村との交渉を進め一日も早く村造りの決定されんことを切望してやまない。

機織部の全廃等

天龍社改革へのきざし

天龍社では養蚕家の要請に従って昨年来その運営上の改善を計っているが、この程三十年度下半期の現状を次ぎの如く発表した。（本村選出委員下平逸氏提出に依る）

一、天龍社は毎年製糸年度末（五月）に成果、事業内容を詳細に報告し農民の要望を入れ、改善の資料とする。

二、時又工場は具体的処理方法の見通しがつかない

三、機構改革については。

イ、部課統合を一部廃止。

ロ、原料部技術員中地区担任制と学研を廃止。

ハ、季節技術員を町村自賄にし相当数を減員した。

五、機織部は全廃した。

六、経費の節減については、繭一〆当り二百円の節減見通しがついたので高率配分の線に添って努力している。

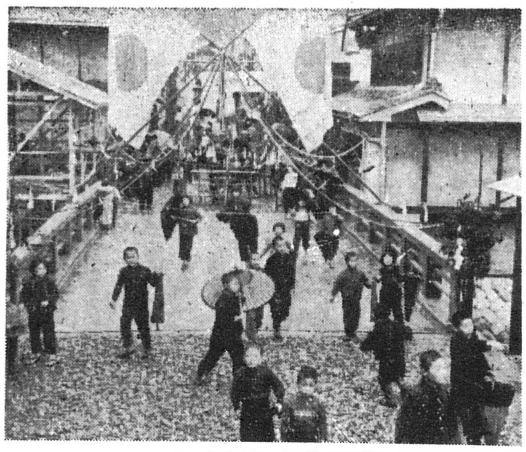
七、単協駐在の技術員の配置替えについては農民の納得の出来る線で行う。

新川橋ついに竣工

盛大だつた渡り初め

県道時又の新橋が、昨年十一月から二百余万円の予算をもって架替工事が行われていたが、三月三十一日に完成し、その竣工式が挙行された。そぼ降る春雨の中で竣工式が行われ、龍丘村長は工事請負者三六組社長に感謝状を送り飯田建設事務所工務課長の祝詞があった。

幅員五米の立派な永久橋となり橋の側の田畑、土屋、岡島、加藤、今村氏の家屋の改修もともなって、みごとな景観となった時又商工会は煙花を打ちあげて祝意をあらわした。



＝写眞は式典風景＝

活発だつた討論会

北方合併に賛成が多い

去る二月七日青年会は「わが村はどのようにして合併すべきか」という課題を掲げ、役場二階に於て村民討論会を開催した。

まず村長、議長から合併に関し他村との交渉の経過の発表をきゝ次に青年会が年令層から指名した六名の弁士の所見が発表された。

下平議長（青年会長）は、この六名の弁士の所見の中から、左の四つの問題をとりあげ、順次これに就て討議した。

一、地勢上から考えられる妥当なる合併

二、雄村と合併した方がよいか弱村と合併した方がよいか。

三、合併する場合自村が主体性（指導権）を握るということの考察

四、中学整備、道路の開通、上水道の施設、厚生施設等具体的条件から見た合併

右の問題につき討論の結果、主なる意見を拾ってみると

○わが村は飯田地域と龍峡地域に介在しているが、将来を考える時飯田地域に組した方がよい。

○合併の目的は「経済的に強力な村」を造ることであるから、雄村と組すべきである。

○主体性を握るという事に促われてはならない。合併してしまえば雄村も弱村も一体となるのだから、いつまでも雄村が有利であるとは考えられない。

○中央道が開通すれば天龍峡が要地となるから、南方村と合併した方がよい。

○中学整備はすでに松尾に於て、毛賀の地籍に六千坪の校地が準備されておるから、松尾と組めばすぐ着手することが出来る。

○道路はすでに豊飯国道が予定されているから、距離は短縮される。

○上水道の水源地は、伊賀良村のくらが沢から水を求める外はない。

○中央病院を完備することによって厚生施設が出来る。

国保一部負担金

窓口徴収に就いて

＝解説＝

一、実施 四月一日より

一、医者の窓口徴収

その都度医者の窓口で半額づつ納めて下さい。

一、当座、お金が無くて困る人は役場へ申し出て「一部負担金徴収猶予証明書」の交付を受け、それを受診証に添えて医者の窓口に提出すれば、その場でお金を出さなくてもよいのであります。

国保一部負担金窓口徴収は、国保の精神から言うと、逆もどりすることでこのましい事ではないのであるが、この点につき役場当局は次のように言っている。

国保の財政は村民の皆様から徴収している保険税が三三六万円と国庫補助一五〇万円とで五割給付の保険事業が営まれて行くのであって、残額の五割は皆様から納めて頂く一部負担金でまかなっているのでありますが、ところが最近この一部負担金の滞納が多くなって来たので、皆様に代って全額を医師に支払うことが出来なくなりましたので、国保では医者に半額を支払い、残りの半額は医者の窓口へ皆様から直接支払って頂くことになりました。

今迄にくらべると大変不都合になりましたが、国保財政が撃つまでの間しばらくの御辛棒をお願いいたします。滞納が多くなってやむを得ないことなので、村会の御承認を経た次第であります。

木下氏知事表彰を受く

昭和三十年産米集荷優良団体並に個人表彰式が去る三月二十九日県庁で行われ、その伝達式が三十一日に下伊那地方事務所に於て行われた。

本村の木下利男氏は優良農家として同日知事表彰を受けられた。これは同氏の食糧生産に対する過去の実績や今年度の事前売渡申込制度の深い理解と、常にたゆまざる研究と努力の結果である。

きとくな

伊原さんの遺志

時又の伊原春男氏母堂はるさんは去る二月に八十二才の高齢で長逝された。

春男氏は母堂の遺志として香奠がえしとして金子若干を村の社会福祉協会へ寄附された。

なお死ぬ数日前まで刺していたという雑布三十枚を寄附されたのでこれを学校にまわし、活用していたゞく事にした。

戸籍の窓（一、二月分）

（出生）

子の氏名	性別	父の名	部落名
久保田恵子	女	利夫	駄科
今村 博	男	力人	時又
園原 寿子	女	寿美男	駄科
林 計隆	男	隆夫	時又
今村 文生	男	保郎	時又
熊谷むつ子	女	正一	駄科
佐々木朝子	女	尚夫	桐林
牧ノ内昭子	女	昭三	桐林
久保田八重子	女	友直	駄科
市瀬寿美子	女	安治	時又
斉藤 隆	男	敏男	時又
熊谷 和子	女	利	駄科
森 恭子	女	和四郎	上川路
熊谷 千春	女	順三	駄科
小島 潔	男	恵蔵	駄科
市瀬 忠伸	男	久男	駄科
上垣 博	男	芳美	駄科
中島 栄子	女	忠己	桐林
林 栄子	女	富男	桐林
木下 幹夫	男	芳雄	駄科

（死亡）

氏名	性別	年令	部落名
森山ミつへ	女	六二才	桐林
林 マツ	女	七三才	〃
岡村 直	男	八一才	〃
上松 隆人	男	八四才	時又
小林 計美	男	五〇才	長ノ原

（婚姻）

中島 公海	長ノ原	木下かね子	駄科より
原 和雄	桐林より	福田 光江	栃木県宇都宮市
中島富貴子	桐林より	坂巻 諮郎	三穂村
窪田 幸三	上川路	今村いそ子	川路村より
折金 茂子	駄科より	小木曽 滋	龍江村
今村 昭三	長ノ原	今村 春子	長ノ原より
今村 守	松尾村	佐々木清子	桐林より
米山 真俊	伊賀良村	久保田富穂	駄科より
松原 英子	時又より	都築 益夫	東京都太田区
塩沢 竹雄	桐林	林 あさえ	桐林より
前沢 忠夫	長ノ原	根本 よし	茨城県より
小池 忠志	長ノ原	間生 頼子	鼎町より
原田なか子	駄科より	岡島 友	下久堅村
河原美那子	時又より	小谷 幸一	山梨県北巨摩郡
今村 栄子	長ノ原より	関島 淳	千葉県
関島 千恵	駄科より	武藤 達三	鼎町
新井 辰一	駄科	牧野内寿子	下久堅村より
木下 ちか	上川路より	関島 宗次	川路村
伊藤 隆直	駄科	小木曽美春	伊賀良村より
山田 寿博	時又	本島タツ子	鼎町より
小笠原正栄	駄科	山岸喜美子	伊賀良村より
中島 浪子	駄科より	福沢 豊	喬木村
今牧 善次	駄科より	木下はる子	岡谷市
今村 清松	時又	内山志ずゑ	下久堅村
田中 昭二	駄科	塩沢 千文	松尾村より
塩沢 巳春	桐林より	飯田 猶治	静岡県浜名郡
塩沢 千里	長ノ原より	新井 敏夫	川路
関島 政彦	駄科	福島 利江	川路村より
林 喜代	桐林より	下平 進	上伊那郡七久保
市瀬 武	駄科	木下カズエ	三穂村より
塩沢みはる	長ノ原より	音尾 安男	千葉市浜野町

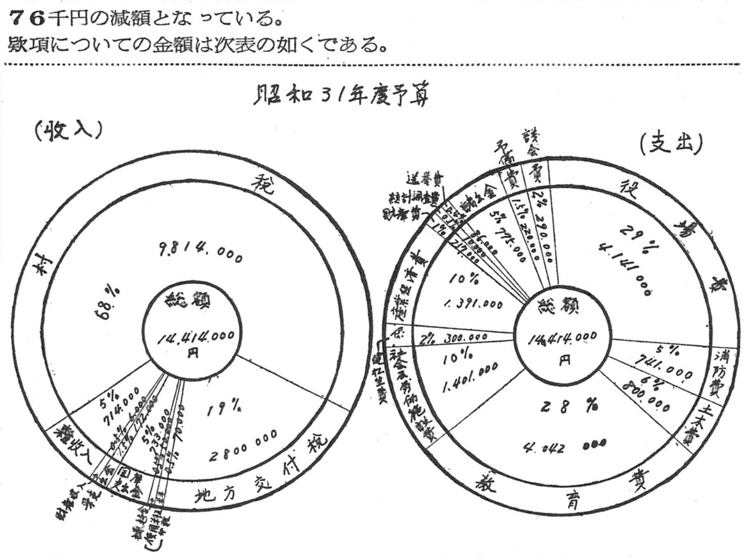
31年度予算決る

総額1千441万余円

去る三月二十三日の議会の議決を得て村当局では、昭和三十一年度の本村才入、才出についての予算を発表した。

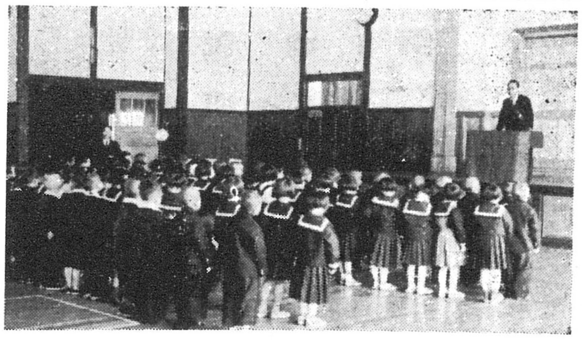
それに依れば本年度予算総額は14414千円となり、前年度当初予算額より176千円の減額となっている。

款項についての金額は次表の如くである。



畦畔拾話

果樹を植えざる者は百姓にあらずというくらい昨今の農村は果樹熱にとりつかれてしまった。農民は養蚕業は駄目だといゝ、東京で開催されている世界絹業会議では今後の絹糸の消費は増加するだろうと云っている。たしかに養蚕経営の面に於て改革しなければならない点が無しとは云い難い。けれども一方リンゴや梨でもやがては豚にでも食わせなければならないときが来るかもしれない。来ないとは断言出来ない。実はそうした最悪の事態を計算に入れて新しい果樹経営の計画が樹立されなければならない。水面に漂う浮草の如く不安定な経営計画の改革が何よりも先になされる事が大切ではなかろうか。



今日から僕等は一年生

四月二日本村小学校入学式が挙行され、父兄に手をひかれ喜びに胸をふくらめた児童一〇五名が入学した。

新生活運動の展開
各区に気運高まる

◇…本村の新生活運動もようやくちょにつき各区ともその組織…◇…の研究、具体的な実践事項のとり決め等を行っている模様…◇…であるが、先進区上川路、時又からその事例を拾つて紹介する…◇

上川路の新生活運動

上川路では過日区長、分館長、区会議員、組長、婦人会役員、青年会役員等が寄り協議の結果次ぎの様な実践事項をとり上げ、お互いに厳守することを申合せ、その印刷物を各家庭の見易いところへ貼ってある。

上川路新生活運動
実践事項

一、すべての集会の開会時間を守り合う（閉会の時間も出来るだけ早く切り上げる）
一、次の事のおかえしを廃止する
1病気見舞のおかえし
2出産見舞のおかえし
3節句祝いのおかえし
4入学祝いのおかえし

右の事項を昭和三十一年四月一日より実践する。

上川路新生活実践委員会

時間の励行は新生活運動の基底をなすもので上川路がこの度これをあげたことは飛躍的進歩であり、龍丘村の新生活運動の先駆をなすものであろう。（木下館長評）

時又第一・五常会及び八常会の新生活運動

時又の第一・五・八常会も殆ど上川路と同じ事項がとり上げられている。第五常会の規約を見ると次のとおりである。

時又第五常会新生活運動

㈠実践組合の名称
時又第五常会新生活実践組合
㈡実践委員会の組織
委員長（常会長）小島若一
副委員長（婦人会班長）沖田加年茂
（青年会班長）田中金司
実行委員
組長　十東組　小島　若一
十西組　木下　右治
十一組　田中　順治
婦人会十東組　小島きさ江
班長　十西組　沖田加年茂
十一組
青年班　田中　金司
沖田　岩雄
沖田　四郎

蚊と蠅の撲滅に就ては衛生協力員木下右治が係長となる。

㈢実践事項
1すべての集会の開会時間を正確に守りあう（閉会の時間も出来るだけ早く打ち切る）
2次の事のおかえしを廃止する
①病気見舞のおかえし
②出産見舞のおかえし
③節句祝のおかえし
④入学祝のおかえし
⑤葬式の返礼の葉書は組合内へはくばらない。
3婚礼について
お部屋見舞を廃止する
4蚊と蠅をいないようにする
㈣実践期日
昭和三十一年三月二十八日より

古老の話

記念館の石垣

清水眞吾氏談

大正四年四月時の学校長下平芳太郎氏が役場へ来て、「記念館の石垣が出来たから受けとってもらいたい」と申し出られた。時の村長下平鎮息氏は私（時の収入役）にも同行せよといわれたもの現場へ行ってみると、すくったばかりの石垣がすでにはらんおり、石垣と土との間に間隙が出来ていて、その間隙へ土が落ちる音がしていた。下平村長も音のする石垣は初めてだと言うので、よく注意してみると崩壊の一歩前であったので直に取り崩しを申しつけて帰った。

その石垣は前に三四回とっては崩れとっては崩れているので、大へん困ったのであるが、今度こそどうしても崩れないように築かねばならないというので、村長さんは私に「お前は自分の石垣を多く積んだ経験があるから、今度はお前にまかせるから何とかせよ」といわれた。

そこで私は松尾村の宮下兼吉氏に相談したところ、いろ〳〵研究した結果、「今度は更に控え二尺五寸の石三十五個を加えて二重石垣を積み、更に土手でも崩れないよう槌打ちを丁寧にして、土をかためて土だけでも持つようにし、裏詰石は石垣の倍位とし、これも槌打をして仕事を親切にしたらどうか」と言うので、私もそれがよかろうと思い、宮下氏に仕事をまかせた。

ところが宮下氏が人夫賃は人夫が相当かゝるが、かゝっただけは支払う予算があるかというので、私は学校林の砂防工事を青年に頼んでやってもらい、その補助金を青年に支払ったが、その残りの補助金をあてゝ、かろうじて石垣が成功したのであります。

そこで敷地が出来たので、大正四年大正天皇即位の記念として、新築したものが只今の記念館であります。その後石垣は一度も崩れた事はありませ

他校視察

PTA副会長　木下きの

雪まじりの風が吹いて寒い。零下四度の朝、申し込んである責任上時又駅へ来て見ると、PTA他校視察と思われる方は一人も居ない。失望し乍ら待って居ると茂木校長先生と桐林の林さんが見えた「中学整備問題の起って居る大切な時なのに、PTAの皆様もう少し大勢参加して下さればよいのに」と私は内心不平で駄科迄来ると林さん、代田さん等女子の参加者十名程になったのでやっと心が落ちついた。

午前中は伊賀良村の独立中学見学。私達一行十四名が伊賀良中学へつくと、手近な所にある応接室に通された。きちんと整頓され埃一つないテーブルの上は拭き清められて光って居た。丁寧に出されたお茶碗も菓子器も、普通学校で使用されて居る様な殺風景なものではなく、何か温みのある家庭的な雰囲気を感じた。美事な万年青が青磁の水盤に生けてある。ここで暫く藤綱校長先生と宮島先生に（去年迄龍丘に居られた）教育の事、PTA活動の事、施設の事、色々とお尋ねした後、次々と完備した校内の施設を説明して頂き乍ら見学した。

図書室、理科室、体育館、工作室、音楽室、保健室、家事室、其のすべてが完備した施設を見た私共、自分の村の薄暗い荒れた校舎のみ見慣れて居る目は只感嘆するのみ。この様な校舎に勉強する生徒達はほんとに幸福だ。こうした明るい校舎からこそ立派な卒業生も送り出されるのだと思われ、又一面にこうした立派な建築の蔭には、お村の方達の一方ならぬお骨折り、血のにじむ様な土地提供の犠牲もあったであろうに、と想像し乍ら又元の応接室に戻り、カレー汁を頂いて昼食をすました。ここは冬季だけの味噌汁給与だと云う、この点龍丘の完全給食の施設は有難いと思った。

宮島先生に伊賀良と龍丘の生徒について御感想をとお聞きしたら藤綱校長先生がそこにいられるのに平然と仰言った「龍丘の生徒はよくあんな乏しい施設の中でひるまず不自由を克服してやって居るな、と今にして気の毒に思われてならない、龍丘の生徒の方が活動的で自主性がある」と、宮島先生は龍丘に長く居られたからつい里心を起して、あんな風にほめて下すったかな、とは思い乍らも、私はうれしかった。

飯田の西中も同様見学を終えて又一しきり激しく降り出した雪の中を帰宅して炬燵にあたり疲れた目でぼんやりと、夕方の窓外を眺めて居る時、中学二年の子供が学校から帰って来た、「まず俺らの教室はかなわんに、今日は曇っているので中が暗くて、先生が書く黒板の字が読めんもんで、見ようとして目をこすって居るうちに、目も頭も痛くなっちやった」折も折今日この我が子の訴えを聞いてはっとした。雨の降る日、曇った日、光線の入らないあの古びた教室の暗さ、子供達の健康な視力もだん〳〵痛められて行くであろう それにつけても西中の明るく光線を取り入れた近代的な教室が目に浮ぶ。今日なぜもっと大勢が視察して下さらなかったか。伊賀良の子供よりも自主性があってよいと宮島先生は云って下さる。この大切な村の子供達のために、又こうした不自由な学校で努力して居て下さる先生方にもより一層の教育効果をあげて頂くために、私共母親が一本の綱の様に一つ心となり当局へもお願いをし、又家庭に於ても幾分なりとも節約して資力を生み出すべく協力し合う時が、いよ〳〵来たのだと切実に感じた。

村の予算の事を知らない私は只ひたむきな願いを持つものではあるが、どうか色々な障害を押し切って一日も早く立派な中学校の実現されん事を…大切な村の子供達のために祈りつつ二月九日他校視察記のペンをおく。

御芳志

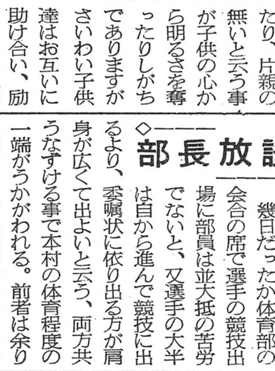
村外居住の方で館報代として御送金下さいました左記の方々に御礼申しあげます。

佐世保市三川　伊原寛二氏
仙台市小田原　下平三郎氏
松本市　新井芳実氏

【お願い……各所に新生活運動を実行していられるかと思いますが実行されている所は館長まで報告して下さい】

詠草

○唐松の林を透る日射し弱く猿庫はいまだ雪の溶けなく　塩沢　義男
○白百合の香のたつ部屋に語りあふ窓に吹雪の風はなりつつ　久保田楓美子
○家族等の足袋洗い干す冬の日にわが白足袋は小さく乾く　木下　きの
○帰る子を待ちつつ年は明けにけり外の面は晴れて白き月かげ　橋爪丘の人
○雪荒るる夕べちまたを帰り来て火の香の強き炬燵にあたる　木下　右治
○春近き入江の汐の静かなり旅来てここに愁ひもあらず　中田　美稔



随想リレー

身辺雑話

林　千代

次回のバトンを小林三郎さに渡す

遠く故郷を離れて暮している子供の所へすら思う様に便りも書けない忙しい毎日を送って居る私でありまして、随想リレーのバトンをいたゞいてもゆっくりと考え、そして書く時間の無い事が残念でなりません。

激しい油泡の中にコンガリと狐色に変ってゆく〝てんぷら〟を見つめながら、時おり心に浮かぶとりとめも無い事を、客足のと絶えたわずかな時間を利用しての走り書きでありますので、皆様に読んでいたゞける程の文でない事を最初にお断わりして置きます。

石の上にも三年という諺がありますが私も現在の店を出してからもう三年の才月が流れました。店とは名ばかりで、時又でも一番小さな店であります。

夫に死なれ、小さな子供を四人も抱えて馴れない〝てんぷら屋〟を始めたのでありますが、行く末の事など考えると当時は泣きあかした夜も幾度もありました。

女が一人で生きてゆく社会のきびしさに触れ、ほんとうに心も乱れましたが、いとけない子供達を見るにつけ石に噛りついても生き抜こうと決意し、努力し続けて参りました。

お陰様で今ではどうやら仕事にも馴れ、役場、農協等から多量の御注文もいたゞける様になり又御近所の皆様におひき立てに依り活しの見通しも立つ様になりました

そして今年は息子も中学校を無事に卒業し、東京へ就職する事になり、一つ〳〵心の重石がとり除かれる様な喜びを感じて居ります

兎角生活が貧しいと卑屈になったり、片親の無いと云う事が子供の心から明るさを奪ったりしがちでありますがさいわい子供達はお互いに助け合い、励まし合って暮らして居りますので、その点私を安心させもしますが、いじらしさについ心をうたれる事がしば〳〵であります。

考えてみればまだ〳〵私達の苦難の道は続きそうです。けれども何時かは子供達とこの時代の想い出話が笑って出来る様なときが来るかもしれません。その日のために私は恥かしくない今日を送りたいと念願しております。

婦人会のアンケート
改選は一年制が断然多い

本村婦人会政治部では此の程行ったアンケートの結果をまとめて発表した。内容は選挙法、役員任期農協婦人部との関係についてゞあり、会員八百名中五百十二名がその回答をよせて来たものである。

一、選挙法

A、総会を開いて選挙する。　八十二名
B、従前通り（班長会にて選挙）　百九十九名
C、班会で投票したのを持ち寄る　百九十八名
D、わからない。　二十九名
白紙　四名

二、改選は一年制か二年制か

A、一年制　二百九十八名
B、二年制　百八十九名
C、わからない。　二十一名
白紙　四名

三、農協婦人部会長は村婦人会長と別がよいか

A、別がよい。　百八十五名
B、同じでよい。　三百十一名
C、わからない。　十二名
白紙　四名

四、意見を書いた人

（年齢別）

	提出数	意見を書いた数
二〇才ー二九才	三六	一一
三〇ー三九	一三三	三九
四〇ー四九	一四四	三七
五〇ー五九	五九	五
六〇以上	四	一
年齢不明	一三七	一四
白紙		四

学校職員の移動

転退職員
中学校長茂木住平先生退職
〃講師田中重穂先生退職
〃教諭松尾豊先生喬木中へ転
小学校教諭望月永也先生退職
〃教諭知久光男先生追手町小へ転
〃教諭古村和子先生高陵中へ転

転入職員
中学校長羽場敬亮先生売木校長より
〃教諭高木庄三先生高陵中より
〃教諭井沢正斗先生松尾中より
小学教諭杉田政治先生伊賀良小より
〃教諭田中久先生智里小より

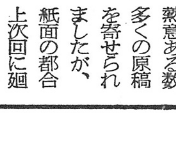
健康な体を作ろう
◇部長放談◇

幾日だったか体育部の会合の席で選手の競技出場に部員は並大抵の苦労でないと、又選手の大半は自から進んで競技に出るより、委嘱状に依り出る方が肩身が広くて出よいと云う、両方共うなずける事で本村の体育程度の一端がうかがわれる。前者は余り出場を好まない選手を本館分館等の名に於て無理往生させる所に問題があるのではないか。後者は私もすでに経験した事でありますが選手自体に体育に対する考え方の不充分なる点があるのではないか私達が体育と云うものをもっとはっきり考えて生活の中に入れて行くべきではないでしょうか。体育そのものは他人や公民館のものでなく自分自身のものであるとはっきり意識してかゝらねばならないと思う。体育の行き方はレクリエーション的のもの保健的の運動等一般体育（仮称）は全村民だれでも出来、又体力時間のゆるす範囲に於て毎日或は定期的に個人又は集団で行う事が最も良いと思う。特技体育（仮称）は自から進んでその分野に個人又は同好者によって時と所を得て大いに技を磨き、その成果を試す会を開いて共にたのしむと云う行き方になるのが良いのではないか。そして、この考え方に公民館がタッチして連絡援助等をするのが本質の様な気がする。本村にも個人的によい例がありますから御紹介する。一般体育では長の原の今村清さんがそれで今村さんは起床と同時にお腹を三百たゝくそして軽い準備体操の後裸になってホッキを駈歩で一廻りしてくる。これを毎日続けもう三十年にもなると云う、そしてその結果は五十余才の今日二十代の若さを持ち自称ボデービルと云う如く、私は今村さんを見て実に感心するのである。もう一つは学校下の中島兼義さんである。自分の好なマラソンを帰宅後学校の庭に真白いユニホームの姿を見ない日は少ないと云う、その結果一昨年昨年と県下縦断駅伝の選手として活躍する所となった。この御両名は本村の代表的な体育者であると思う。私達も今村、中島さん等の様な考えと行動をやりたいものです。そして全村民がこぞって両氏の如き健康な身体を作り若さにみちみちた希望のある明るい生活を築こうではありませんか。

（体育部長　原　康次）

第四位に入賞
新聞コンクールで

下伊那公民館主催、中部日本新聞社、信州印刷株式会社後援の郡下各町村発行の新聞コンクールが去る三月二十日長姫高校に於て開かれ本村の公民館報は第四位となった。第一位は川路、第二位は伊賀良、第三位は三穂であった。



編輯後記

熱意ある数多くの原稿を寄せられましたが、紙面の都合上次回に廻る分があって申訳ありませんが悪しからず御了承下さい。尚次回の〆切は今月末日と致します。